

「隅田川」を歩く

能「隅田川」の舞台は、その昔、在原業平が遠く都を離れた隅田川のほとりで水面に群なして浮かぶ白い鳥を見て「名にし負はば いざ言問はん都鳥 我が思う人はありやなしや」と歌に詠んだとされる地です。

能「隅田川」は近世芸能にも大きな影響を与えた名曲であるためか、その謡蹟は隅田川周辺にいくつが残されています。隅田川西河畔には、梅若丸の母が、子の菩提を弔うために髪をおろして庵を結んだという妙亀塚（台東区橋場・妙亀塚公園）があり、詞章にも出てくる「浅茅ヶ原」は浅草寺の北側に広がる原野で、中世は葬送の場所であったといえます。今回は隅田川東河畔白鬚橋北にある天台宗梅若山木母寺（東京都墨田区堤通）を訪ねました。縁起によれば貞元二年（977）忠円阿闍梨によって梅若寺として開かれ、後の慶長十二年に木母寺（梅の字より「木」「母」とされ、今に伝わっているそうです。演能当日の舞台が無事に勤められるようにと、「ご祈祷をお願いしたところ、応対に出られた副住職の阿部亮照氏が「まだ出来たばかりですが」と、本堂二階にある祈祷所にご案内下さったうえ、「ご好意で、昨年（2008年）すみだ郷土文化資料館開館十周年記念展「隅田川文化の誕生 梅若伝説と幻の町・隅田宿」で展示された寺宝「梅若権現御縁起」の複写を拝見させて頂くこともできました。資料によれば、中世の隅田川西側には石浜宿、東側は隅田宿がそれぞれ奥州への街道筋にあり、渡し場としても賑わう都市的な場であったようです。それまで都を遠く離れた鄙びた土地というイメージでしたが、能「隅田川」の悲劇は、中世に多く横行していた人買いによる子別れの悲劇の代名詞とも言える気がして、知る人のいない東国で我が子を失った梅若の母がいつそう哀れに思えるとともに、里人によって手厚く葬られたことに救いを感じました。隅田宿は墨堤の築造と奥州街道の付替えにより、内陸側側と千住宿への移転が行なわれたことで木母寺のあった場所も当時とは違いますが、毎年必ず梅若丸の命日、四月十五日（旧暦三月十五日）には梅若忌の法要が行われ、大念仏の代わりに謡が奉納されることは今でも変わりません。また、木母寺近くの梅若小学校の教科書副読本には「隅田川物語」として能「隅田川」が取り上げられ、児童にも親しまれているそうです。浅草駅からは車で十五分ほど、最寄り駅は東武伊勢崎線鐘ヶ淵駅徒歩十分。桜の季節は多くの花見客で賑わう場所としても有名です。

平成二十一年皐月吉日

廣田幸稔

吾妻橋から隅田川上流を臨む
木母寺全景 写真の奥には高
速向島線の高架が見える。高
架下の隅田川東岸河川にはブ
ルーシートの列があった。



寺内の梅若塚
木母寺副住職阿部氏と梅若堂の
前で



梅若堂 損傷が激しいため、周囲を
ガラスで囲っている
御堂の正面から塚と隅田川が見え
る。御堂のあちこちには戦争中に受
けた焼夷弾の跡が残る。



梅若権現御縁起（複写）
梅若塚

